

訪日団を迎えて追悼式典

「…歴史問題の解決のためには、被害者の寛容さと、加害者の節度が不可欠であります。被害の事実を伝えることに比し、加害の事実を伝えることは、困難なものがあります。加害者はこのことを肝に銘じて、加害の事実と向き合い続けねばなりません。…私たちは、引き続き、この安野の地において、受難者に対する追悼を行い、日中友好の運動を継続いたします。そうすることによって、いつか、この『受難の碑』が『友好の碑』になることと思います。…」

「…正しく歴史に向かい、歴史を鑑として、戦争に反対し、平和を尊んで、子や孫たち後の世代に再び戦争の苦しみを味わわせないようにすること、ここに、私たちの集いの意義があるのではないのでしょうか。私は、この記念碑は歴史を伝えるだけでなく、いつか日中両国の人々の友好の証になると信じます。…」

これは10月19日の追悼式典であいさつをされた二人の方の文章から抜粋したもの。前者は、西松安野友好基金運営委員会委員長の内田雅敏さんのもの。後者は、安野中国人受難者・遺族代表の曲啓傑さんのもの。「安野 中国人受難之碑」を前にした二人のあいさつには立場を超えた共通の思いが込められているように感じられる。ことに石原前都知事による尖閣領有化問題に端を発した日中両国間の不穏な空気、それをさらに増幅させるかのような安倍政権が息巻いている中で行なわれた追悼式でのお二人のあいさつだったから、なおさらその印象は強いものがあったのかもしれない。

そんな日本の空気のためか、この日の天気はあまりいいものではなかったけれど、心配された雨は明け方には上がり、どんよりと曇った空模様ではあるが、何とか雨は降らずにすみそうな朝となった。それにしても安野発電所のあるこのあたりは静かだ。緑深い山々に囲まれ、何種類かの野鳥のさえずりが曇った空の彼方に溶け込んでいく。こんなのどかで平穏な山あいの

町のこの地に戦争中の強制連行・強制労働の歴史が刻まれていることは、知らなければとうてい想像できない。

追悼式は定刻10時から始まった。黙禱を捧げた後、主催者として、はじめに紹介した内田さん、曲さんに続いて西松建設から代理人として高野康彦弁護士があいさつされる。安芸太田町長、中国駐大阪総領事館政治文化室長、善福寺住職、広島県会議員と来賓があいさつをされた後、中国の楽器二胡が演奏される。二胡の演奏を背景にして皆で記念碑へ献花し、式そのものは終わるが、中国の遺族の人たちにはまだ大事な儀式が残っている。

お札に模した紙を燃やして死者を弔うという中国の儀式だが、初めのうちは変わった習慣だと思っていたこの習慣も何度か経験するうちに自然なことと見られ



るようになってきた。それぞれの国にはそれぞれの習慣がある。お札を燃やして弔うことにどういう意味があるかはよくわからないけれど（おそらくあの世で困らないようにということなのではないでしょうか）、こうして慣れてくるということも、それなりに交流ということなのかもしれないと思う。

遺族の人たちは記念碑をそれぞれの想いで見つめ、さわり、受難者の名前を探す。どんな思いが去来しているのか。それから、発電所の遙か上にある貯水槽、親族である受難者たちが働かされた貯水槽を確認するために上る。そこでまた何を想うのだろう。

善福寺で追悼法要

追悼式を終えて発電所からほど近い善福寺へと移動し昼食をとる。善福寺は戦後、5人の中国人犠牲者の遺骨を預かったお寺で、追悼式の後には毎回亡くなった犠牲者の方々の法要が執りおこなわれてきた。住職の藤井慧心さんは式で来賓としてもあいさつされたし、何より記念碑の題字を書かれた。法要の際に使う線香は、住職の心配りもあって中国のものを使う。日本のものより太く長い。中国の人はそれを頭の上に捧げるようにしてお辞儀をし、鉢にそなえる。ちょっとしたことだけど、ここにも日本との違いがあるのだが、中国の人から見れば日本人のお参りの仕方に違和感を感じるだろう。でもそれもきつと慣れてくる。

法要の後、当時の中国人受難者の様子を知っておられる谷キヨコさんのお話を聞く。谷さんは裁判の時には証言を陳述書として提出してくれた人だ。88歳という高齢になられ、

足も弱っておられるようだが、午前の追悼式から参加されており、特に今回は中国から遺族を招いて追悼式を行なうことに区切りをつける日になるというので、



夕方までのすべての日程を一緒に回られた。谷さんのお話に出てくる、受難者におにぎりや芋を分けてあげたという話は遺族にとって少しは慰めになるだろうか、と思いながら聞いている自分がいるけど、これは僕にとっての慰めかもしれないな、とも思い返したりする。

収容所跡、強制労働の跡をたどる

善福寺での行事を終えた後は、津浪の収容所跡、香草の収容所跡、土居の取水口と、強制連行・強制労働の現場を太田川上流へとたどっていく。車での移動だから、さほど時間はかからないが、この距離(8km)

の導水トンネルを、当時の貧弱な道具で、満足な食事もとらしてもらえず、昼夜を分かたずに延々と掘り進めさせられたというのは、気が遠くなるような労働だったろうということはさすがに、容易に想像できる。

とはいえ、どの現場もすでに当時の面影はほとんど残っていない。津浪では民家と田んぼの穏やかな風景、香草にはお宮のお堂とちょっとした杉林、土居では今も稼働している取水口といったふう。津浪の収容所跡から見える山並みの裏側には中国人受難者の掘った導水トンネルが存在するという事は、説明を聞かなければ実感できないし、香草の収容所での生活は栗栖さんの証言でこそ、その苛酷さが生々しく浮き上がり明らかになる。そうして中国人受難者の親族、遺族の人たちの眼には、このさほど変わっているとは言えない風景が特別の場所として記憶に残るのだろう。

土居の取水口での行事が終わるのを待っていたかのように、少し雨が落ち始めた。

立場を超えて支えられている追悼式

今回の追悼式は一つの区切りとなるということからか、改めて地域の人たちの支えということを感じる。追悼式では安芸太田町長や県会議員のあいさつもあった。そしてこの日一日の日程を支えてくれたのは、なんとといっても地元の人たちだ。記念碑の施工は地元の吉村石材店、法要を営んでくださった善福寺、当時のお話を聞かせてくれた谷さん、裁判での証言から支援活動まで一緒に運動してきた栗栖さん。翌日の交流会での吉村石材店さんの「仕事として扱った石の大きさはこれまでで最も大きいものだったが、仕事の意義の大きさはもっと大きいものだ」という内容のお話は胸に響いた。

和解に応じて謝罪と記念碑建立、和解金を支払った西松建設、記念碑の敷地を提供し追悼式の日には駐車場や土居の取水口施設を開放する中国電力、そして地元の支え。追悼式はそれぞれの考えや立場の違いを超えて行なわれてきた。中国の人たちは帰国してから日本での経験を話したいと言ってくれた。人と人が顔を合わせて交流することがお互いの理解や信頼をつくっていくし、小さな積み重ねではあるが、この積み重ねこそが力になり未来につながって欲しいと思う。